

日本福祉大学社会福祉学部の導入教育

総合演習Ⅰの実践例



藤田 紀昭

日本福祉大学・社会福祉学部

日本福祉大学社会福祉学部の導入教育

日本福祉大学社会福祉学部では二〇〇〇年度から一年生対象の「総合演習Ⅰ」という科目の中で導入教育を行っている。これまでも導入教育は「現代と学問」「教養演習」という科目で行われてきた歴史があるが、二〇〇〇年度からの新学科設置、カリキュラム改革に伴って、より導入教育としての特色を明確にした科目として「総合演習Ⅰ」が配置された。まずはそのシラバスの抜粋を紹介する。

総合演習Ⅰシラバス

■講義の目的

総合演習Ⅰは一年生を対象とした演習(ゼミナール)形式の授業です。演習は教員が主となり授業を進めていく講義形式の授業とは異なり、学生と教員がともに主役となり主体的に学習を進めていく授業です。

総合演習Ⅰには三つの目的があります。

- 1 自ら学習を進めていく習慣、姿勢を身につけるこ

と。

教員が講義することをノートに書きとめ、覚えるといった受動的な学習ではなく、自ら学習テーマを設定し、学習を進めるという主体的学習態度を形成することです。

2 自ら学習を進めていくためのスキルを習得すること。

ここでいうスキルとは、必要な文献の集め方、それに関連する図書館の使いこなし方、レポートの書き方、レジュメの作り方、学習発表や意見表明(プ



ふじた・もとあき ●一九六二年、香川県生まれ ●主な著書・論文に『ディサビリティ・スポーツ』ぼくたちの挑戦』東林出版社 一九九八年、『スポーツ文化を学ぶ人のために』(共著 世界思想社 一九九九年、『体育教育を学ぶ人のために』(共著 世界思想社 二〇〇一年、『スポーツ白書』(共著 笹川スポーツ財団 二〇〇一年 ●文章を書く力、プレゼンテーション能力、ものごとを深く考える力が学生に身につくかどうかは、教員にそうした力があるかないかに大きくかわってくるように思われます。その意味で教員(私自身を含め)の資質向上は避けて通れない問題だと感じています。

レゼンテーション)のし方、討論の進め方などです。この授業では年間三回のレポート提出が課されています。担当教員は適宜、レポートを添削して返してくれることになっています。

3 学問することの面白さを知り、幅広い教養を身につけること。

こうした学習を通じて、いわゆる「テストのための勉強」ではなく、自らテーマを設定し、学び、「物事の真実」に近づいていくこと、つまり学問していくことの面白さを知ることです。

■開講方法

週一度、授業が開講され、これが学習の核となります。一クラスは二十五名程度で、個人あるいはグループで学習(サブゼミ)を進めていきます。サブゼミのための時間(サブゼミ・アワー)が設定されています。

■春季セミナーについて

社会福祉学部で学ぶ意義を確かめること、宿泊を伴う共同体験の中で教員と学生、また、学生同士の理解を深めていくことを目的として「春季セミナー」を実施します。

このように総合演習Ⅰでは、教員と学生、そして、学生同士の相互作用を前提とし、学生達が主体的に学ぶこと、学習を進めていくためのノウハウを習得し、学ぶ面白さを知ることを目的としている。これらの目的は本学の大学教育の目的「学ぶ力」「働く力」「生きる力」の育成という課題から、導入教育が担うべきものとして理解されている。

さて、これらの目的達成のためには、教員もかなりの時間とエネルギーを注ぎ込む必要がある。サブゼミといっても学生達はそのやり方もわからないし、レポートを書いたこともない。それ以前に、物を書くこと自体なれていない学生がほとんどだからだ。

大変な労力を要するものの、手をかければ、かけた分だけ学生の成長も顕著だ。その成長ぶりを見ること、そしてその中で作られる学生との人間関係が、担当する教員の喜びであり、財産といえる。

筆者は二〇〇〇年度にこの科目を担当すると同時に、総合演習Ⅰ運営委員会(総合演習Ⅰの内容を充実させ、円滑な授業運営をサポートするために、教務委員会のもとに組織された)のまとめ役を経験した。そこで、今回は筆者の担当したクラスの実践例および、学部としての導入教育への取り組みについて紹介する。

二〇〇〇年度総合演習Ⅰ実践例

表Ⅰが二〇〇〇年度筆者が担当したクラスの学習内容の一覧である。表の内容を詳しく紹介することで実践例の紹介としたい。

一年間の学習の導入期

授業回数一〜四回

前期の初期は一年間の学習の導入期である。グループ分けをし、クラスリーダーを決めるといったことに加え、一年間どのように学習を進めていくかを十分に学生に話し合わせ、自分たちで学習を進めるという認識を持たせることが課題である。

教員が決めた学習テーマや本を受動的に受け入れ、教員の指示にしたがって勉強するのではなく、学習の進め方から学生達が主体となって決め、自分たちで決めたことは責任を持ってやりこなすという意識を持たせることが重要だ。高校までとは全く違う授業スタイルに最初は学生達も途惑うが、徐々に自分たちが動かないことには授業が進まないことに気づき、そして、授業を自分たちが作り上げていくことの面白さを感じ始める時期である。

この間教員は、学習の進め方の例を出したり、サブゼミは具体的にどのように進めるのか等について、アドバイスを

表1 2000年度総合演習Ⅰの実践例

日程	回数	授業の内容	
4. 12	1	自己紹介、オリエンテーション、班分け、係など	サブゼミ 春季セミナー準備等
4. 19	2	学習の進め方などについて	サブゼミ 春季セミナー準備等
4. 26	3	学習の内容について	サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 10	4	図書館ツアー	サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 17	5	春季セミナー準備	サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 24	6	春季セミナー	
5. 31	7	サブゼミ	
6. 7	8	発表：うめ	家族・障害者
6. 14	9	発表：さとし	家族・虐待、家庭内暴力
6. 21	10	発表：まつ	家族・思春期の親子の関わり合い
6. 28	11	発表：さくら	家族・絆、兄弟
7. 5	12	発表：ちゅうりっぷ	家族・離婚、結婚、母子家庭
9. 24	13	朝から討論会(10時00分～16時00分)	
9. 27		朝から討論の代休	
10. 4	14	新しい班分け、係りの決定	
10. 11	15	学習方法の決定 学習テーマの決定	
10. 18	16	学習の柱立ての検討、発表順番の決定	
10. 25	17	集合の後サブゼミ	
11. 1	18	中間発表 5班、1班、3班	
11. 8	19	中間発表 4班、2班	
11. 15	20	サブゼミ	
11. 22	21	5班発表と討論 仕事の現状について	
11. 29	22	1班発表と討論 食品の問題性	レポート報告集編集委員会の立ち上げ
12. 6	23	3班発表と討論 死―自殺について―	
12. 13	24	4班発表と討論 食生活について	
12. 20	25	2班発表と討論 アルコールについて	
1. 10	26	まとめと自己評価 レポート報告集の作成配布	
5月12日	第1回コンパ クエスチョン		
5月23日24日	春季セミナー		
6月	第2回春ゼミ打ち上げコンパ・持ち寄り(奥北公会堂)		
6月7日	第1回レポート締め切り「4年後の自分―私の過去・現在・未来」→添削後コメントつけて返却		
7月18日	第3回前期打ち上げコンパ・持ち寄り(奥北公会堂)		
9月24日	朝から討論		
9月26日	第4回朝から討論打ち上げコンパ・持ち寄り(奥北公会堂)		
9月24日	第2回レポート締め切り「無敵のハンディキャップを読んで」→添削後コメントつけて返却		
10月4日	第3回レポート締め切り「前期学習のまとめ」各班ごとに提出		
12月20日	第4回レポート締め切り「後期学習のまとめ」各個人で提出→添削後コメントつけて返却		
1月27日	第5回1年打ち上げコンパ		

- ・うめ、さとし、まつ、さくら、ちゅうりっぷは前期の各グループの名前。
- ・前期は統一テーマを「家族」とし、各班が関心のある視点から学習を進めた。
- ・後期は統一テーマは決めず、各班ごとに独自のテーマに取り組んだ。
- ・前後期ともこうした学習方法は学生達が話し合って決定した。

を行った。この時期、教員がクラスのメンバーの顔と名前を一致させることはとても重要なことである。名前を覚えられているというだけで、遠くて近寄りがたい存在と思っていた大学教員に親近感を持つからだ。学生との信頼関係構築の一步といつてよい。

また、このクラスには電動車いすを利用している学生が一名在籍していたため、彼女にどのようなサポートが必要なのかを障害学生自身に語らせ、クラス全員の理解と協力体制が取れるように配慮した。

四回目は図書館の利用方法を学ぶ「図書館ツアー」(図書館によるサービス)を利用し、情報の集め方の基礎を学ぶ時間とした。

春季セミナー 五月下旬には静岡県 の 嬌恋へ 出向き、一泊のセミナーを行った。キャンプファイ

ヤーや卒業生との語らい、クラスでのレクリエーションが主たる内容であった。

電動車いす利用の女子学生ももちろん参加した。彼女をどうサポートするかを考えることで学生達は期せずして障害者の介助体験が可能となった。また彼女自身、自分にはサポートしてくれる仲間がいないと、学生生活を続けることができないことを説明することで、学内外で学業、生活

をサポートをしてくれる仲間を増やした。

学生達はサブゼミアワー(毎週総合演習Ⅰが行われる次の時間帯)や放課後の時間を利用してキャンプファイヤー等での出し物を考え、準備し、練習を行った。その過程とセミナーを通して仲間づくり、クラスづくりを行えた点を学生達は評価していた。ちなみにキャンプファイヤーでは筆者も学生達とともにピンクレディーの UFO を踊った。

学習の発表

授業回数八〜十二回

学生達は三回目の授業以降、グループごとに時間を作り、学習を進めてきた。この間教員は学習の方法に関して細かなアドバイスを行った。テーマの決め方、そのテーマの学習に必要な柱立ての立て方、まとめ方、レジュメ作成のポイント、発表の仕方などである。

先にも書いたが、自分たちで学習を進めることはほとんどの学生にとって初めての経験である。時間の都合をつけて集まっても(学生達は、サークルやバイト、ボランティア活動等)かなり忙しい)、結局たわいのないお喋りで終わってしまうことが多い。小学生が誰かの家で宿題を一緒にやるような感覚から抜けきれないのである。

集まった時には何を決めなくてはならないのか、その手順、次回の集合時までには各自が個人で学習を進めておか

なくてはならないことを理解させることが必要であった。

さて、いよいよ発表である。発表方法等の指導をしてきたとはいえ、最初の発表班はたいいてい、書いてきたレジュメをただらだと読むだけである。質問や意見交換といつてもほとんど手が挙がらない。レジュメも、構造化されていない、読みにくいものが普通だ。

発表やレジュメの作成方法については回をおうごとに改善がなされるよう教員がアドバイスした。調べたことを全部発表しようとする時間が足らなくなるため、ポイントをついた発表をすること、レジュメはそれに応じたものでなくてはならないこと、書き写したことをそのまま読むのではなく、自分なりに理解し、自分の言葉で発表すべきことなどである。

質問や意見表明に関しては、学会のように何もしなくても手が挙がるということはほとんどない。そのため、学習発表の前に一人一人に紙を配布しておき、質問事項や意見をまとめながら発表を聞くように促した。学習発表終了後に、各班単位で質問や意見を出し合い、その後それぞれをまとめてクラス全体に発表するという方法をとった。そのため、机はいわゆる講義型でも、コの字型でもなく、班ごとにまとまり、話し合い易いような配置(バズセッション

型)にした。こうすることで、かなり活発に質問や意見が出されるようになった。

朝から討論会

前期の学習発表では、質問の時間、意見分な討論を行うことはできなかった。そこで、後期が始まる直前に、前期のテーマについて、討論会を行うことにした。五つの班がそれぞれ自分たちのテーマに沿ったディベートができるように準備し、各班五十分の持ち時間で、朝十時から、夕方四時までの討論会である。

ここでは討論のし方をマスターすることがメインテーマである。討論をどう組織し、構造化させ、進めるのかについて、討論会を進めるなかで学習していった。

しかしながら、教員の力不足、夏休みボケの学生、準備不足という条件が重なってか、思ったほど活発な討論にはならなかった。意見は出るようになっても深く討論できないといった状態である。一年間を通してみても、意見表明、討論のし方についてはこちらが期待しているほどの改善はみられなかった。今後の課題である。

後期授業

授業回数十三〜二十五回

後期の学習は基本的には前期の後半の方法を踏襲した。班がえをした後、班ごとに学習

テーマを決め、自分たちで学習を進めていった。授業回数十八〜十九回の時に、中間発表を行い、質問や意見を受け、それを踏まえて、後半に各班一コマ時間(実質七十分程度)を持ち時間として発表、討論を行った。学習の方法がある程度理解されたこと、前期に比べて準備期間が長かったことなどから、発表内容、方法とも前期に比べると充実した内容となった。

各班発表の後に討論の時間を取ったが、時間に追われることが多く、ここでも十分な討論はできずじまいであった。

レポート 一年を通して、四回のレポート提出を求めた(課題については表1の下部を参照)。その

うち一回は各班で一つのレポートをまとめるというもので、残り三回は個人提出であった。個人で提出されたレポート三回についてはすべて教員が添削し、コメントを付して返却した。

最初のレポート課題を出す前に、レポートの書き方について教員がまとめたマニュアルを学生達にわたしておいた。にもかかわらず、初期に出されたレポートは、文章、内容、構成ともに非常にレベルの低いものだった。

特に多く見られた特徴としては①レポート全体の構成がなされていない(内容、体裁とも)、②一文、一段落が長す

ぎ、読みにくく、内容も理解しにくい、③引用、参考文献等の記載の方法がためあるいは記載がない、というものであった。①②に関して言えば、学生がレポートを書き始める以前に問題があるわけで、授業の中では特にレポートを書き始める前の準備について指導した。

レポートの添削は文章の直し、誤字脱字の指摘が中心であり、最後に、「構成」、「内容」、「文章」に分けてコメントをつけ、A〜Cまでの評価をつけて返却した。

結果、回を重ねるごとに学生の文章は目に見えて良くなり、読みやすく、理解しやすいものになった。丁寧な指導によって学生は伸びるということを実感した。添削には最初時間を要したが、学生の文章が良くなるにつれ、短縮された。筆者の場合、大学への行き帰りの電車の中で添削をした。正確な時間はわからないが、四〜五時間前後で添削し終えたと思われる。レポート提出の翌週には添削したものを返却することができた。

また、前期、後期の学習の結果を「レポート報告集」としてまとめ、学生に一部ずつ配布した。

学習の評価

この授業の評価は次の三つを指標として行った。出席点(三十点)、レポート(個人提出)の三回を対象とし、一、二回目は提出していれば各十

五点、三回目は内容等から二十点満点で評価(合計五十点)、学生による自己評価(一年間の取り組みを五つの視点から自己評価したもの、二十点)。

学生の自己評価を授業の成績に組み入れているところが他の教員にはない特徴だと思われる。総合演習Ⅰの目的の一つに主体的に学習を進めていくことがあげられている。が、主体的に学習を進めることができたか否かは本人以外評価できない。そこで、このような自己評価を取り入れることにした。

自己評価を行う視点は①レポートやレジユメの書き方を身につけることができた②発表の方法を身につけ、自己主張を行うことができた③学問(学習)の面白さを発見できた④積極的なクラス運営ができた⑤多様な人格に触れ仲間づくりができた、の五つである。それぞれの視点について自己採点し、その得点根拠を説明してもらっている。

そこで出された得点を学習評価(成績)の一部として採用しているわけである。

授業評価

先の学生の自己評価は、筆者の授業に対する学生の評価でもある。授業の目標が達成できようような授業であったか否かが学生によって評価されているわけだ。昨年度の場合、学生達の学習達成度(自己評価)

を百点満点に換算すると平均六十九点。私の授業のできも六十九点ということになる。

一年間の成果

学生自身による

自己評価の内容から

最後の授業時には「自己評価」の他にも「総合演習Ⅰの授業の進め方、内容、教員に対する意見や感想、希望」「二年生での総合演習Ⅱでの個人目標」「春季セミナーの改善点」等について学生達に意見を書いてもらっている。これをもとに学生達は一年間で何を学んだのかをみていく。

「各班の発表を聞いて、それに対する質問・意見などを言い合うことはすごく良かったし、得たものは大きかった。」

「このゼミに入って一番良かったと思えることは友達がたくさんできて、みんなと仲良くなれたことです。また、高校などでは自分の意見を発表する機会がほとんどなかったので、このゼミで自分の考え方を説明したりすることは最初は本当に難しかったです。でも、相手にわかるような説明のし方、レポートの書き方は就職してからも絶対に役立つと思うので忘れずにいようと思います。」

「初めはレポートや発表の仕方をもう少し詳しく説明してほしいと思った。いざ、レポートやレジュメを作ろうと思っても作り方がさっぱりわからずかなり苦戦した。けれども回を繰り返すうちにやり方が少しずつわかってきた。」

「…それらを調べて自分の思ったことを言ったり、自己主張はあまりできなかったと思う。発表の方法もどこをポイントに絞ったら良いのかわからず、みんなにはわかりにくい発表だったかも。」

「班ごとに自分たちでやりたいテーマを決め、自分たちで、学習を進めていくことができたので積極的に参加できたが、本当に面白いというところまでいく学習ができなかったような気がする。」

「高校までは人前で話すことがどちらかというと苦手だったのですが、少しずつ自分の意見をみんなの前で言えるようになってきました。これは発表や討論を通して身につけることができたと思います。…ディベートだけではなく、自分たちの意見を主張するような討論もやってみてかったです。」

これら学生達の意見を見る限り、主体的な学習への取り組み、レポートの書き方やレジュメの書き方が身についた

ことを評価している。意見発表や討論に関しては個人差はあるものの、意見表明したり、討論すること自体なかった高校時代と比較すると、ある程度進歩したようであるが、まだまだ満足してはいないといったところだろうか。

しかしながら、勉強を本当に楽しむ、面白くなるまで内容を突き詰めていくという点において、満足している学生はほとんどいない。というのもこの点に触れている学生が非常に少なかったからである。この一年間では学習の中身に関心を持たせ、勉強することの面白さを体験させることはできなかったことを認めざるを得ない。

学生達を感じた勉強の面白さはあくまで主体的に勉強することの面白さであり、学問的な面白さではない。その意味では「遊び」の面白さと変わりがない。この点は筆者の力不足と勉強不足である。

こうしてみればシラバスに書かれた総合演習Ⅰの三つの目標のうちの前二者は及第点、最後の一つは落第点という事になり、学生の下した六十九点と言う評価はかなりの的を得た評価といえよう。

成長する学生

学生の学力低下が指摘されるようになって久しい。本学社会福祉学部の場合、多様な入学試験方式をとり、多様な学生を入学させている。

そのため、学力に関しても多様な学生が混在しているのが現状である。

多様な学生がいることで学生同士が様々に刺激し合い、好影響をもたらすことが期待されている。しかしながら、学力について言えば、大学(教員)側の意図的な働きかけがない限り、学生同士の相互作用の中で伸びるということは望み薄である。

様々な学力レベルの学生を入学させている以上、学生の学力低下を嘆きつつ、旧態然とした授業を繰り返しているのでは教育者としての責務を果たしているとは言えない。

ところで、次の二つの文章を読み比べていただきたい。

(A) 印象に残っている内の一つに、慎太郎が自殺未遂を繰り返している場面を感じたことは、障害者が就職をしたりするのは漠然として健常者と違うだろう。障害者は私達より、より多くのことについて悩み考えて「大変だな。」って言う人もいるだろう。けれどこうも考えられないだろうか、自分自身のことについて考える機会が多ければ多いほど、心が豊かになるということが自感できると私は考えている。

(B) 公共事業の見直しが進む中、二十六都府県が来年度当初予算方針で地方単独公共事業費を削減することが

二十二日、読売新聞の都道府県調査でわかった。理由はいずれも「財政難」。国の景気対策に合わせ、増やしてきた公共事業が地方財政を圧迫しており、削減の動きは今後も加速しそうだ。

私の地元でも無駄な公共事業がたくさんある。私の住んでいる町には県と市の図書館がある。それなのにさらに図書館を建設しているのだ。本当に意味があるのか疑問だ。今ある図書館は別に古いわけでもなくどちらかというと綺麗だ。しかし図書館で一番大切な本が古いものばかりだ。だから新しい「図書館」を作るのではなく、新しい「本」をたくさん入れるのが先決だ。

いずれも学生の承諾を得て掲載した。(A)は筆者のクラスに在籍したT君が『無敵のハンディキャップ』(北島行徳著・文芸春秋社)を読んで書いたレポート(九月提出)の一部である。これほどひどい文章にはなかなかお目にかかれない。主述の不一致、誤字があり、文章が迷走している。(B)は同じT君が一月に新聞記事を読んで書いたものである。文章の稚拙さ、句読点の使い方に問題はあがるが、記事はコンパクトに要約され、自分の意見も明確に述べられている。(A)に比べるとかなりの改善がみられる。

実はT君は三回のレポートでは文章の改善があまり見ら

れなかった。そこで、彼には、新聞記事を書き写すこと(六回)と、新聞記事を要約し、コメントをつける(十三回)という特別課題を出した。提出された課題はすべて添削し、返却した。その結果が(B)の文章である。T君自身、クラスの中で一人レポートの評価が悪いことを知り、悩んでいたこともあって、素直に課題に取り組んでくれた。「課題をこなすうちに、何が問題なのか頭の中がだんだんクリアになってきた」とは本人のコメントである。

わずか二ヶ月足らずの特別メニューで彼はここまで成長した。T君以外の学生は三回のレポート提出でかなりの改善が見られた。筆者自身、学生達の成長に驚かされると同時に、学生達の可能性と、時間をかけて学生達を指導することの重要性を認識できた。

総合演習Ⅰ運営委員会の活動

総合演習Ⅰの内容を充実させ、円滑な授業運営をサポートするために総合演習Ⅰ運営委員会が組織された。教職員合わせて六人の委員会である。ここでは、この委員会が二〇〇〇年度一年間で取り組んできた活動の一端を紹介する。

(1) 企業関係者の講演会

本学社会福祉学部の多くの学生は将来、社会福祉関係の仕事につきたいといふかなり明確な目的意識を持って入学してくる。事実その大半は各種福祉施設や社会福祉協議会など社会福祉の現場に就職していく。その一方で毎年百名前後の学生が企業就職するという現実がある。

ところが、一年次のアンケート調査では企業就職を希望している学生はわずか三人であった。そこで、委員会では将来の可能性を限定的に考えるのではなく、四年間社会福祉学部で学んだことは、企業に就職してもいかすことができるということを確認してもらうために、企業関係者の講演会を企画した。社会福祉関係の現場の情報は、一年次においても授業そのほかで手にすることができるが、企業についての情報は得る場がほとんどないからである。また、将来の自己像を持つことで、現在の学習により主体的に取り組めるのではないかと期待もあった。

実際にはテルモ株式会社の在宅医療プロジェクトで活躍されている方と、JTBで障害者の旅行などに関わっている方に話をいただいた。

話を聞いた学生達は社会福祉に関する知識が様々な場で活かせる可能性を理解できたと好評であったが、現段階で企業就職を考えていない学生達の関心をひくことに苦労が

あった。

(2) ニュースレターの発行

夜間主、昼間主合わせて三十一の総合演習クラスがあった。また、専任教員、非常勤教員を含め、それだけの人数の教員がこの授業を担当していたわけだ。それぞれの教員はそれぞれに工夫し、苦労しながら授業を行っている。他のクラスが何をしているかということは学生ならずとも関心のあるところだ。

しかし、他クラスが何をしているかという情報はあまり公にはならない。そこで、各クラスが何をしているか、教員はどういう苦労をしているかという情報を共有し合うことを目的として、ニュースレターをほぼ一ヶ月に一回のペースで発行した。このほかニュースレターには企業関係者の講演会のことなど様々な情報を載せ、充実させた。

三十以上あるクラスの情報をいかに効率よく掲載するか、また、学生、教員が関心を持つ情報をいかに早く掲載するかが課題である。

(3) 『総合演習Ⅰの手引き』の刊行

総合演習Ⅰの授業運営のノウハウの蓄積と共有、教員間にある様々な差異の解消(例えばレポートの書き方やレジュメの作成方法など)、総合演習Ⅰの目的を大学教育の中

で明確にし、その充実を図ることを目的として、『総合演習Ⅰ手引き』を作成した。

「総合演習Ⅰの目指すもの」「総合演習Ⅰの前身」「レポートの書き方」「レジュメの作り方」「口頭発表のポイント」「レポートの添削事例」「総合演習Ⅰの進め方の事例」「障害学生の対応事例」など教員にとっても、学生にとっても役立つ情報を掲載している。実際には二〇〇一年度から役立てられている。導入教育の意義、内容、方法を一同に載せた価値ある手引きだと思う。関心のある方は本学社会福祉学部事務室までお問い合わせいただきたい。

おわりに

二〇〇〇年度に取り組んだ日本福祉大学社会福祉学部での導入教育(総合演習Ⅰ)の事例および、総合演習Ⅰ運営委員会の活動について報告してきた。試行錯誤を繰り返しつつ、筆者自身が学生から様々なことを学び、成長させてもらった一年であったような気がする。

これが最良の取り組みとは思わないし、事実改善の余地は多々ある。読者諸氏のご意見、ご批判を賜ることができれば幸いである。